

○地域貢献研究 T-3

研究課題 「地域の医療職等への「IPUあいらぼ」利用促進に関する研究」

○研究代表者 医科学センター教授 武島玲子

○研究分担者 看護学科 教授 吉良淳子 講師 高村祐子 助教 黒田暢子
(11名) 理学療法学科 教授 富田和秀 助教 岩本浩二 作業療法学科 助教 真田育依
放射線技術科学科 助教 大久保和幸
人間科学センター 嘱託助手 庄司俊彦
医科学センター 准教授 桜井直美 助教 角 友起 嘱託助手 増成暁彦

○研究年度 平成27年度

(研究期間) 平成26年度～平成28年度(3年間)

1. 研究目的

本学では、平成25年度に「IPUあいらぼ」が開設され、学生、付属病院職員等に利用されている。次段階として、IPUあいらぼを地域へ広く開放する必要があるが、そのためには、シミュレーション医療教育を広く普及させ、本教育指導者の育成を図ることが重要となる。本研究は、「IPUあいらぼ」を大学外へ解放すること、シミュレーション医療教育を提供すること、本教育プログラムを作成すること、教育するインストラクターを養成することが目的である。特に看護師の場合は、新人看護師研修制度が努力義務化され、多くの病院で研修プログラムが実施されているが、中小規模の病院や医院の現状では、研修実施や、指導者の確保が困難なことから、多施設合同での研修が必要である。現在、茨城県看護協会がそれらの役割を担っているが、技術の研修は十分とは言えないため、「IPUあいらぼ」において、シミュレーション医療教育による看護師の現任教育を行うことが提案できる。これは看護師ばかりでなく他の専門職(生涯教育のシステムがまだ確立されていない介護士等)においても同様な役割を担っていくことが必要であり、これらの点も検討する。

今年度は、本教育法の普及にはどのようにしたらよいかを本学の全学生に調査し、検討する。また、「IPUあいらぼ」の認知度向上のための方策を検討することが目的である。ミニ講座、中学生職業体験講座、県内看護学校の本学見学時の紹介等を開催した。

2. 研究方法

本年度は、以下を計画、実施した。

- ①本学の全学生(学部・大学院・助産・認定看護過程)を対象に、【本学学生のシミュレーション教育と「IPUあいらぼ」に関する意識およびニーズ】についてのアンケート調査を実施し、本教育の普及と「IPUあいらぼ」の効果的な運営方法を検討する。
- ②認知度向上のために、ミニ講座を開催し、その反応から今後の対応を検討する。
- ③地域への解放として中学生へ「スポーツ選手をサポートする仕事とは?」、「病院で働くいろいろな職業の人を知ろう」、「からだの中を画像化する技師」、「呼吸の仕組み」の講習会を実施する。
- ④広報活動として、県内看護専門学校の学生・教員の本学見学時に「IPUあいらぼ」の説明会を開催する。

3. 研究結果

- ①【本学学生のシミュレーション教育と「IPUあいらぼ」に関する意識およびニーズ】についてのアンケート調査

本学全学生(学部・大学院・助産・認定看護過程)700名(RS3年生除く)を対象に調査し、回答は210名(男57名、女153名)で回収率は30%であった。回答者は学科、学年に偏りがみられたが、学部学生は1年生19%、2年生21%、3年生21%、4年生32%で、4年生の回答が多かった。シミュレーション教育の理解は低かったが必要性の認識は高く、学科合同の多職種によるシミュレーション実施の希望が多かった。「IPUあいらぼ」の名前は知っているが、HP等からの情報は知らず、授業や自己学修としての利用は少なかった。利用に関する学生の意見では、利用方法等の宣伝、授業に組み込む、利用を簡単にする、環境整備の必要性、イベント・セミナーの開催等多くの意見があった。

②ミニ講座の開催

「気管挿管の実際と介助」(H27.12.17&22)を開催し、合計20名の参加があった。「輸液管理、採血、注射、導尿のしかたを学ぶ」、「テーピングのしかた」等の開催(H28.3)を予定している。

③中学生職業体験学習(H27.7.29,7.30,8.4,8.7の4回開催)阿見中学校、竹来中学校2年生25名

テーマは「スポーツ選手をサポートする仕事とは?」(増成、武島)、「病院で働くいろいろな職業の人を知ろう」(付属病院看護部旭他)、「からだの中を画像化する技師」(大久保、中島修、川村)、「呼吸の仕組み」(角友、角正)の4講座を開催した。参加者は、ほとんどが楽しく体験でき、医療について知ることができ、興味がわいたというアンケートの結果であった。「医療大学でやってみたいこと」については、薬を考える、病原菌の研究、作業療法士や理学療法士の手伝い、実際に障害を持った人への対応など多くの意見がみられた。

4. 考察(結論)

本学学生へのアンケート結果から、シミュレーション教育の認知度は低い、多くの学生が多職種によるシミュレーション教育の開催を希望しているので、その対応を検討したい。現在「IPUあいらぼ」はチームワーク入門の実習場所となっているが、1年生ばかりでなく、4年生のチームワーク演習にも利用した学修を提案していきたい。「IPUあいらぼ」を利用する授業を増やす活動やサークル活動による学生主体の勉強会を開設することも検討していきたい。現在大学HPに「IPUあいらぼ」の利用方法や内容が掲載されているが、その認知度は低いようである。広報活動を含めて今後の啓蒙活動が必要である。運営に関する将来計画をする必要がある。

ミニ講座を開催し、好評であったので、今後開催を継続していきたい。また、本年度に気道吸引システムが整備されたので、これを活かしたセミナーを次年度には地域へ向けて開催したい。

中学生への職業体験学習は2中学校に実施したが、要望が多いので、今後地域貢献研究センターと協働して本学全体としての開催に繋げていきたい。また県内の看護専門学校からの本学見学に今年度は「IPUあいらぼ」を加えていただき実施した。認知度の向上、地域への解放の1つの手段となり、看護学生が看護師になった後の利用を促進するよい機会となるので、継続していきたい。

また、今年度は県内看護師教育については、実施できなかったが、重要な課題であるので、次年度には実施していきたい。

今後の課題として、「IPUあいらぼ」を使用した授業や講習会の充実、シミュレーション教育の実施とその指導者の養成をしていくことが、「IPUあいらぼ」が理解され、地域へ開放するために必要なことである。

5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

- ①中学生を対象とした地域貢献活動－中学生に伝える“職場”としての大学および付属病院－. 角正美, 旭佐記子, 増成暁彦, 大久保知幸, 角友起, 寺門通子, 野村加津子, 川村拓(放射線技術科学科, 中島修一, 古家宏樹, 武島玲子. 茨城県立医療大学紀要21巻(印刷中))

6. 参考文献